

7.1.5 国際交流

【評価項目 7-0-1】 国際交流（国内外における教育研究交流）

- （必須要素）国際化への対応と国際交流の推進に関する基本方針の適切性
- （必須要素）国際レベルでの教育研究交流を緊密化させるための措置の適切性
- （選択要素）外国人教員の受け入れ体制の整備状況、運用の適切性
- （選択要素）教育研究及びその成果の外部発信の状況とその適切性

<2003 年度に設定した目標>

1. 教育研究の国際的な交流を活性化し、海外の大学との間で教員・学生の交流を促進する。
2. 英語教育を充実して、自然科学の分野における情報発信とコミュニケーションを促進する。

（現状の説明）

「教育・研究の国際的な交流を活性化し、教員・学生の交流を推進する」という本学の国際交流に関する基本方針に則り、理工学部においても外国人研究者の積極的な受け入れ、研究情報の交換、世界市民の精神の育成を目的に組まれた各種プログラムへの参加を促進し、教育研究の高度化・緊密化を図っている。

外国人研究者の受け入れ状況については、理工学研究科（「7.2.4 国際交流」）参照。

大学が実施する国際教育分野のプログラムへの参加者は2004年度に4名のみであった。しかし、夏季休暇等を利用して個人で英語研修等に参加する学生は年々増えている。（2003年度5名、2004年度7名、2005年度9名<関学生協での語学留学参加申込者数>）

また、国際交流と関連して、理系の学術研究分野で「使える」英語能力を磨くための「科学技術英語」や「科学技術英語実習」を開講している。英語コミュニケーションⅡでは、2003年度に実験的にプリンストン大学東アジア学科とネットワークで結び、半分の時間は英語で双方議論を行い、残り半分は日本語で双方議論を行った。科学技術英語実習は、4泊5日の合宿授業であり、2004年度から実施している。期間中、米国イリノイ大学大学院国際言語学専攻科とネットワークを結び、現地の大学院生と科学と現代文化などをテーマに討論を行っている。

（点検・評価の結果）

外国語研修や履修した学生の満足度が高い科学技術英語実習（受講者2004年度38名）は、学生たちが理系の知識を持った国際人としての第一歩を踏み出すためのサポートとして十分機能している。科学技術英語実習などの海外との交流プログラムでは、5名のネイティブ英語常勤講師の存在が不可欠であるが、優秀な常勤講師の定常的な確保がむずかしいことが問題点として上げられる。

（改善の具体的方策）

海外の大学とのより生き生きとした交流プログラムを実現するために、日進月歩するネットワーク技術の動向を注視しつつ、ネットワーク環境の改善を図っていく。また、優秀なネイティブの英語常勤講師を確保できるように人材確保のためのネットワーク作りを推進する。